

令和5年度 非核平和広島派遣事業

— 報告書 —



愛 西 市



非核平和広島派遣事業を通して伝えたいこと

愛西市は、平成 17（2005）年 9 月 9 日に「非核・平和都市宣言」を行っています。戦後 60 年を迎え、原爆による被爆体験が風化されつつある中、核兵器の脅威と人類の恒久平和を願い、愛西市議会定例会にて宣言が議決されました。また、平成 24（2012）年 9 月には「平和首長会議」が提唱する趣旨「世界の恒久平和の実現に寄与するために、世界の都市と都市が国境を越え、思想・信条の違いを乗り越えて連携し、核兵器の廃絶に向けて努力する」に賛同し、加盟しています。

我が国では終戦から 78 年が経過し、戦争を直接体験された方々や戦没者のご遺族の方々の高齢化が進み、戦争の記憶や体験の風化が懸念されています。一方、世界各地では、紛争や侵攻の発生により平和への希求が高まる中、本市としましても将来を担う若い世代に戦争を体験させないという恒久平和への誓いを引き継ぐ責務を果たしていかなければなりません。

本市では、毎年、市内の中学生を広島市へ派遣する「非核平和広島派遣事業」を実施しています。令和 5 年度は、8 月 5 日、6 日の 2 日間にわたり、市の代表として中学生 24 名を派遣いたしました。

生徒たちは市民の皆様が平和の祈りを込めて折って繋げた千羽鶴を、平和記念公園内にある「原爆の子の像」に捧げました。そして、広島平和記念資料館の見学や平和記念式典への参列などを通じて、戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて学ぶことができました。

本書には派遣された生徒たち一人一人が実際に現地を訪れ、見て、聞いて学んだこと、感じたことを記した感想文を掲載しています。

派遣された生徒は派遣後、各中学校で事業報告会を行うとともに、翌年の市平和祈念式では代表生徒が感想文を発表するなど、平和への思いを言葉にして伝えてまいります。

市では、本事業を通じて平和の大切さ、命の尊さ、戦争の悲惨さ、残酷さを将来にわたって伝え、次世代を担う子どもたちが平和を願う心を育むことを願っています。



愛西市非核・平和都市宣言

世界の恒久平和は人類共通の念願であり、核兵器の廃絶は生きとし生けるものの死活にかかわる最も重要かつ緊急の課題となっている。

我が国は、世界最初で唯一の被爆国であり、核兵器の恐ろしさや被爆者の今なお続く苦しみを声を大にして全世界の人々に強く訴え、二度とあの惨禍を繰り返させてはならない。

愛西市は、非核三原則を遵守し、核兵器の廃絶と人類の恒久平和のために努力することを決意し、ここに議会の議決をもって「非核・平和都市」宣言をする。

平成17年9月9日

愛知県愛西市

令和5年度非核平和広島派遣事業（概要）

目的

愛西市内の中学生の代表者を広島県広島市へ派遣し、平和記念公園・原爆ドーム・平和記念資料館等の見学をするとともに、8月6日に広島市において開催される平和記念式典に参列し、平和の尊さを学ぶ機会とする。

また、引率教諭は、行程中生徒を指導し、自身も平和について学んで自己啓発するとともに、学校での平和教育等に活かすこととする。

派遣団

愛西市立中学校の3年生24名及び引率者6名（教諭4名・市職員2名）

・生徒（24名）

（佐屋中学校）			
後藤 瑠那	柳原 彩更	加藤 翼	北川 蔵人
（永和中学校）			
服部 晟大	後藤 愛佳	加賀 陽希	細田 直
（立田中学校）			
水谷 菓乃	山田 進太	横井 依茉	水谷 太一
（八開中学校）			
藤原 響希	水谷 栄斗	鶴見 あゆら	坂 飛我
（佐織中学校）			
斉藤 衿次	鈴木 力斗	堀田 えり	森 菜々美
（佐織西中学校）			
稲生 優之介	長瀬 嵐	松永 結衣	山本 楓

・引率教諭（4名）

谷口 弘明（佐屋中学校）	水谷 行宏（立田中学校）
恒川 紗帆（佐織中学校）	竹村 郁美（佐織西中学校）

・市職員（2名）

小島 洋志（学校教育課）	富田 智美（経営企画課）
--------------	--------------

実施日及び場所

- 派遣説明会：令和5年7月12日（水）
（愛西市役所）
- 派遣日程：令和5年8月5日（土）～8月6日（日）
（広島県広島市）

活動内容

- 派遣説明会への参加
- 平和記念公園や原爆ドーム、平和記念資料館等の施設見学
- 平和記念式典への参列
- 派遣事業感想文の作成
- 各中学校において派遣生徒による事業報告会の実施
- 翌年の愛西市平和祈念式において代表生徒4名による感想文発表

活動レポート

内容	事前説明会
実施日	令和5年7月12日(水) 16時30分～
場所	愛西市役所 北館会議室 2-1,2-2

1. 主催者あいさつ

市長、教育長よりあいさつがあり、非核平和広島派遣業がスタートしました。市長からは「皆さんは愛西市の代表の生徒であり、広島にて平和についてしっかり勉強してください」とのメッセージが伝えられました。

2. 班分け・自己紹介

各班に分かれそれぞれ自己紹介を行いました。別の中学校の生徒同士で班分けしたため、班員は全員が初対面であり、まずは名前を覚えるところからでした。



3. 日程等説明

市職員より事業の日程について説明がありました。2日間にわたる事業のため実施要領を見ながら行程や持ち物などを念入りに確認しました。

4. 事前学習

DVD鑑賞「ヒロシマの記憶」
「相生橋」、「袋町国民学校」の動画を鑑賞し、焦土の風景や苦しむ被爆者の姿から当時の様子を目で体感しました。どちらとも派遣事業中に通る場所でしたので、事前に理解を深めることができました。



活動レポート

内容	広島派遣事業1日目
実施日	令和5年8月5日(土)
場所	広島県広島市平和記念公園内

1. 平和記念公園 13:20~

被爆後、白血病を発症された佐々木禎子さんが病気の回復の願いを込めて折った折鶴が世間を動かし、「原爆の子の像」が建てられました。その像に生徒たちの手によって千羽鶴が奉納されました。千羽鶴はボランティアや市民の方が折ったり繋げてくれたものです。その後原爆死没者慰霊碑に献花を捧げ手を合わせました。



2. 原爆ドーム 14:30~

原爆ドームは元々大正4(1915)年に「広島県産業陳列館」として建てられ、戦時中は官公庁等の事務所として使用されていました。爆心地から約160メートルの至近距離のため建物はとても使用できる状態ではないですが、現在もその姿をとどめています。地元の伝承者より原爆投下の瞬間の話や、その後の悲惨な状況などを聞くとともに、原爆ドームの迫りに圧倒されました。



3. 平和記念資料館見学 15:00~

平和記念資料館は、被爆者の遺品や被爆の惨状を示す写真や資料を収集、展示するとともに、広島市の被爆前後の歩みや核時代の状況について紹介しています。ボロボロになった道具や、血痕の付いた衣類など見るも無残な写真や遺品が並んでおり、戦争の恐ろしさを目の当たりにし、戦争は二度と繰り返してはいけなことを改めて認識しました。

活動レポート

内容	広島派遣事業2日目
実施日	令和5年8月6日(日)
場所	広島県広島市平和記念公園内

1. 平和記念式典（広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式）へ参列 8:00～

午前7時より平和記念公園へ向かい平和記念式典へ参列しました。この日は公園内の空気が張り詰めているように感じました。

【式典の内容】

開式

原爆死没者名簿奉納
広島市長
遺族代表

式辞

広島市議会議長

献花

広島市長
広島市議会議長
遺族代表・こども代表
被爆者代表
来賓

黙とう・平和の鐘

平和宣言

広島市長

放鳩

平和への誓い

こども代表

あいさつ

内閣総理大臣
広島県知事
国際連合事務総長

ひろしま平和の歌

閉式



こども代表の平和に対するスピーチなどに耳を傾け、黙とうの際は周囲が静寂に包まれました。その場にいた全員が恒久平和を願い、思いを一つにしました。

活動レポート

内容	事後報告会
実施日	—
場所	各中学校

1. 発表

派遣事業後、それぞれの中学校にて報告会を行いました。代表として広島に派遣され学んできたことや、感じたこと、考えたこと、更には追加で自分たちで調べたことなどを他の生徒たちに伝えました。



内容	愛西市平和祈念式
実施日	未定
場所	未定

1. 式典にて発表

毎年8月上旬に開催する愛西市平和祈念式では、前年度に派遣された生徒のうち代表者が作文の朗読を行います。生徒自身が見たこと、感じたことを自分の言葉で市民に語りかけることで、より多くの市民が平和を希求し、将来にわたり平和の大切さや命の尊さが伝わっていくことを願っています。

派遣生徒感想文



広島を訪れて学び感じたこと

佐屋中学校 後藤 瑠那

私は、8月5日、6日に広島を訪れました。街はとても明るく平和に見えましたが、過去にはとても大変なことがあったことを今回の体験で実感しました。

特に、印象に残ったことは広島平和記念資料館です。これまでは写真を見るだけでしたが、実際の戦争の様子や戦争で焼けた当時の物、その時の皮膚が焼け溶けて倒れている人々の写真など、今までに見たことのないものを見てとても辛くなりました。そして、平和記念式典では広島の方々はもちろん、県外や外国の方々などとても多くの人に参加していました。式典では戦争のことを語っていました。その中で「世界が平和になってほしい」という言葉が心に響きました。なぜなら、今の日本が平和な状況であるため安心していただけからです。今の日本では戦争がなくても、世界ではウクライナとロシアが激しい戦いを続けています。そして、この戦争がさらに広がったり、他の地域で新たに戦争が始まったりすると世界が巻き込まれると思います。そのために、私たちができることをしようということを今回の非核平和広島派遣事業にて学びました。戦争をなくすために私たちができることは、戦争のことを伝えることだと思います。戦争はとても辛くて、亡くなった方だけでなく生きていた方の心に深い傷を与える悲しいものだという事を次の世代や、現代の人にも伝えていかなければならないと感じました。戦争についての知識を高めることで少しでも平和になると思います。

今回の体験では、今までに見たことのない戦争の恐ろしさ、残酷さを感じる事ができました。学んだことをしっかりとたくさんの人に伝えて、少しでも早く世界が平和になるようにしたいです。

世界から原爆をなくすには

佐屋中学校 柳原 彩更

私は、非核平和広島派遣事業に参加し、命の尊さ、原爆の恐ろしさ、被爆者の方々の思いを学んできました。実際に原爆ドームを訪れ、語り部さんのお話も聞いてきました。内容は壮絶で、私の頭の中では想像することすらできませんでした。しかし、これは実際に起こった出来事で、それも震災とは違う人為的なものだと、何回も自分に言い聞かせていました。そうでもしないと、作り話のように聞こえてしまうからです。

しかし、広島平和記念資料館へ行き、実際の当時の写真や絵画、建物の展示などを見ると「本当にこのボロボロな服を着ていた人がいたのだ」「本当に川にたくさんの死体が流れていたのだ」と思えてゾッとしました。学校の授業の中で第二次世界大戦については十分学んだつもりでいましたが、私が学んだ事はほんの一部に過ぎませんでした。展示されている写真は教科書には載せられないものばかり。それが被爆者の生きていた証なのだと思うと胸が苦しくなります。私が、一番印象に残ったエリアは被爆で亡くなった子供達の遺品と最後の言葉が展示されているエリアです。文章を見ると、聞いたことのないその子供達の声が頭の中に響くのです。

次の日、平和記念式典にも参加することができ、実際に午前8時15分、広島で黙禱を捧げることができました。後日、私は広島で学んだことをどう活かしていくか、と考えました。

平和記念資料館の出口付近に、「交流ノート」と呼ばれるものがありました。そこには英語、フランス語、ロシア語、韓国語、中国語など、たくさんの外国語で書かれた思いが寄せられていました。私がわかるのは英語だけでしたが、どれも「原爆は無くすべきだ」と書かれていました。「人類最初の被爆地は広島。我々は最後の被爆地を長崎にしなければならぬ」この言葉を背負い、世界から原爆をなくす手伝いを小さなことからしていこうと思いました。私のこのレポートもその手伝いの一つになっていけばいいな、と思います。

直接聞いたから受け取れたこと

佐屋中学校 加藤 翼

僕は、8月6日に行われた平和記念式典に参加しました。体験を通してさまざまな人のお話を聞きましたが、その中でも、特に湯崎広島県知事の言葉がとても心に残りました。核兵器が平和のために必要だと訴える人に対し、今起きているウクライナとロシアの話を持ち、「あなたは今この瞬間も命を落としている罪のないウクライナの市民に対し、またもし核兵器が使われることになったら地球上の全ての命に対して責任を負えるのですか」、「もし世界で核戦争が起きたらこんなことが起こると思わなかったと肩をすくめるだけなのではないでしょうか」と話されました。僕は、この話を聞いたときドキッとしました。

僕は、広島平和記念資料館にも行き、この目で核兵器の脅威を見ました。被爆は想像もできないほどの悲惨さでした。それにより核兵器があってはダメだととても強く感じました。式典での湯崎広島県知事の言葉で、自分が他人事のように感じていることに気付きました。みなさんも「核兵器はあってはダメだ」ということはよくわかっていると思います。ただ、「だから自分も協力してどうにかしたい」と思っている人は少ないと思います。

僕は、この話を聞いて核兵器を自分事として捉える人が増えれば良いなと思います。ですが、自分事として捉えたものの何が出来るか、いまいまいちわからないと思います。今回話した「核兵器は絶対にダメだ」と言うこと、さらにそのことを、「自分事として捉えなければいけない」ということを身近なところから広めていくべきだと思います。日本は、被爆を経験して核兵器があってはならないことが広まっています。しかし、世界ではそうではないです。だから、初めは近くから。そして世界に広めていくことが、僕たち一人一人が核兵器廃止に協力できることだと思います。そうしてそのうち核兵器があるのはおかしい。国として恥ずかしいと思うようになれば、必ず核兵器は無くなると思います。

戦争の傷跡

佐屋中学校 北川 蔵人

僕は、非核平和広島派遣事業を通して、今の日本がいかに平和で幸せな状態なのかを改めて実感しました。そして、この平和をこれからも守っていくために僕達にできることは、戦争を他人事として捉えず身近な事として考え、忘れる事のない記憶として伝え続けることだと思いました。

僕は広島平和記念資料館で、当時の人が座っていた影が残っている石段の展示が一番印象的でした。印象的な理由は石段の色が原爆によって変わったのに対し、原爆が投下されたときに人が座っていた部分だけ元の色のままで、その跡を見ることが出来る展示です。僕はこの展示を見て、原爆の犠牲となった人の存在を強く認識しました。原爆が投下された時も当たり前そこに人がいて、辛い思いをした人がいます。78年前から時間が止まっている展示物を見ることで原爆によって被害を受けた人がいて、それは時代が違えば自分の身にも起こり得ることだと分かりました。僕は、修学旅行の震災学習で、実際起こったことは、今見ることが出来る資料からわかるよりも遥かに残酷なものだということを学びました。その経験があり、本当の戦争や原爆の恐ろしさは、今僕が感じている以上なのだと思います。

これらのことを学び、僕の考えは派遣前と大きく変わりました。派遣前の僕は、戦争について考える機会がなく、過去の一つの出来事として他人事のように考えていました。それは良い考えではなく、自分のこととして、もし今自分の周りで起こったとしたらどれだけ悲しいことであるか、それが起こる可能性がこの世界に身近にあるかもしれないことである、と考えることが大切だと分かりました。原爆は78年前の出来事であり、被爆者の平均年齢は今85歳になっています。多くの人にとって戦争が遠い記憶になっているなか、平和を守るためには戦争のことをよく知り、同じことを起こさせないという意志が必要です。そのために、僕たちが次の世代に伝え続けることが大切だと思います。

人々がつくる平和への道

永和中学校 服部 晟大

僕は、今回初めて広島に行き、平和記念公園を訪れました。教科書の写真で見たことのある原爆ドームは、周りをビルに囲まれながら確かに残っていました。被爆する前と比べると建物の左右が吹き飛んでいて、核兵器の威力、恐ろしさを物語っていました。

ボランティアの方からは、公園にある石碑や像、鐘などの話を聞きました。この大きな鐘には世界地図が描かれており、鐘を打つ場所には「原子」を表す絵が描かれていました。これは、この世界から核兵器をなくすことが平和への大きな一歩となる、ということを表しているそうです。被爆した方々の「自分たちと同じような目にはあって欲しくない」という強い意志を感じました。

2日目の8月6日には、平和記念式典に参列しました。式典では岸田総理をはじめとする代表者たちが、平和の大切さを世界に訴えました。僕が特に印象に残ったものは、広島の小学校六年生によるこどもたちの「平和への誓い」です。

彼らは、「被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。」
「誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちが作っていきます。」と宣言しました。みなさんの中にも、「戦争は昔のことだから、今は心配しなくてもいい」と思っている人がいるかも知れませんが、それは違うと思います。僕は、この二日間で戦争によって失ったもの、残ったものをたくさん見ました。それらはとても痛ましく、恐ろしいものでした。そして、決して他人事ではないと思いました。今、まさに世界中で戦火が広がろうとしています。だからこそ今を生きる僕たちが考えるべきです。そもそも平和とは何か、何をもって平和とするのか、一人一人がそれらを自分の事として考えることが大切です。また、平和を実現するために何をすべきか、自分には何ができるのか。戦争という悲惨な過去から学び、みんなで考え、共に乗り越えていきましょう。

広島を街を感じて

永和中学校 後藤 愛佳

1945年8月6日に原爆が投下されてから78年が経ちました。青空が広がっていて、いつも通りの生活が始まろうとしていたことでしょう。その時は突然やってきました。午前8時15分、状況が一変しました。死体で埋めつくされた川、皮膚がただれている人などが描かれた絵を広島平和記念資料館で見ました。私は、それらを見たとき、原爆がもたらした悲劇へのやるせない怒りや、今、平和に生きていることへの大切さを感じました。それと同時に、私たちには何が出来るのかを考えました。まずは、同世代の人たちに興味をもってもらうことが必要だと思いました。そのために、学んだことや感じたことを周りの人に伝えていきたいです。

ボランティアのガイドさんの話では、「広島に植物は育たないと推測されていた」と聞きました。しかし、現在の広島を街は、緑で溢れていて生命力の強さを感じました。生き残った人々が命を繋いでくれたことでつくられているこの街を、大切にしなければならぬと感じました。

私が、2日間の中で一番印象に残ったことは平和記念式典での「平和への誓い」です。特に「自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。友だちのよいところを見つけること。みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。」という言葉が心に残りました。これは平和のために私たちができることです。現代では、ロシアがウクライナへの侵攻に際し、核兵器による威嚇を続けています。悲劇を繰り返さないためにも、核兵器をなくす努力をすることが大切だと考えました。そのため、身近なことから自分にできることを実践していきたいです。

私は、今回の体験を通して、生きたくても生きられなかった被爆者の方たちの分まで精一杯生き、平和を訴えていきたいです。そして、これからも原爆について伝え続けていくことを受け継いでいかなければならぬと感じました。

広島が伝えたかったこと

永和中学校 加賀 陽希

「うわっ」と思わず声が出た。広島平和記念資料館に飾られている絵を目にした時、目を背けることができない現実があることを、改めて実感した。1945年8月6日、広島に原爆が落とされ大勢の方が亡くなった。

その絵を見る前までは、核戦争や原子爆弾に対し危機感どころか関心もなかった。しかし、私が広島で目にしてきたのは、ドロドロの皮膚で川に向かって歩いていく姿を表した絵だった。それを人だと認識するには少し時間が必要だった。一番に湧いてきたのは「怖い」という感情だった。絵のインパクトではなく、「この絵をまだ知らなかった自分」と「今後戦争が起きるかもしれない現状」に。

少し前に、国語の授業で、詩の作者が「8月6日という日が忘れられ、また、核が落とされるかもしれないと思うと恐ろしい」と述べているのを思い出した。僕は、「そんなことないだろ」とか「かわいそうだなあ」程度にしかな感じていなかった。思い返せば先輩方の広島に行った作文を聞いていた時にも「早く終わらないかなあ」と友達と喋っていたのを覚えている。とても情けなくて不甲斐ない気持ちでいっぱいだ。

戦争や原子爆弾などの核問題をどこか他人事のように捉え、深く考えず当たり前の毎日を当たり前のように生きている。戦後78年が経ち、そういう人が増えてきているのが問題だと非核平和広島派遣事業を通じて分かった。

今、世界ではロシアがウクライナに対しての核の使用が危惧されている。「ぞっ」となった。詩の作者が語っていた「恐ろしいこと」が今、起きようとしているのだ。「歴史は繰り返す」という言葉があるが、これ以上罪のない人が傷つかないようにするために、広島悲劇を繰り返さぬために、先人たちの教えを、僕たちは今一度後世に強く訴えなくてはならない。

「核をなくせ」「原子爆弾から自分を守れ」と。

広島を伝える

永和中学校 細田 直

戦争は、二度と起こしてはいけない。これは、ほとんどの人が思っていることだと思います。ですが、今回、非核平和広島派遣事業に参加して、私はこのことを改めて痛感させられました。

1日目の8月5日、平和記念公園を案内していただいた後、広島平和記念資料館で原爆について学びました。多くの遺品や当時の写真、絵などが展示されていて、一つひとつが戦争や原爆の残酷さを物語っていました。その中で印象に残っているのが、被爆したある女の子の写真です。その子は、顔に大きなガーゼのようなものを着け、細い腕に包帯を巻いていました。私は、学校に戻った時に発表するために、展示品の写真を撮っていましたが、あまりの痛々しさに撮ることを躊躇い、最後まで撮ることができませんでした。

また、原爆が落とされた後の広島の人々の写真と絵も、同じように写真を撮ることを躊躇いました。写真が白黒のものでよかった、と考えてしまうほど、現実であった光景と思いたくない人々の様子が写っていました。絵からも、人々が焼けただれて苦しんでいる様子が痛いほど伝わってきました。なぜ、ただ普通に生活していただけの人々が、こんなに苦しまなければいけないのだろう。そう思い展示を見ている間、辛い気持ちになっていました。

今までは、戦争はしてはいけないことだと思っていても、あまり実感がなく、どこか他人事のような感じがしていました。しかし、非核平和広島派遣事業を通して、他人事ではないと気づかされました。そして、二度と繰り返さないためには、伝え続ける必要があります。今、被爆者の方々は減り続けています。だからこそ、話を聞いた次の世代が、また次の世代に語り継ぐことが大切だと思います。現在ロシアによるウクライナ侵攻も続いています。一人一人が戦争を知り、伝え、平和に向けて行動していくときだと思います。そのためにも、今回広島で見てきたことを伝えていきたいです。

二度と同じことが起きないために

立田中学校 水谷 菓乃

今回の非核平和広島派遣事業で、私が改めて学んだことは、命の尊さはもちろん、被爆して亡くなってしまった方たちの想いを次の世代に必ず伝えていかなければならないということです。

これまで戦争のことは、曾祖父から話を聞いたり、社会などの授業で写真を見たりしただけで、戦争や原爆を身近に捉えていたわけではないので、被爆された方たちの想いを想像することはできませんでした。広島派遣事業に参加して、私の戦争に対する想いと被爆してしまった方の想いは、全然違うものだと感じました。

広島平和記念資料館で見た被爆者の方やそのご家族の写真やメッセージでは、「もっと生きたかった」という言葉をとってもたくさん見ました。私は、生きたかった人も多いだろうとは思っていましたが、写真につけられていた被爆者の方たちのそれまでの人生のエピソードを読んで、「なぜ生きたいと思ったのか」という理由を知り、被爆した方たちにも先の人生があったのだと思うと、被爆者の方たちの想いを、次の世代にも繋げていかなければいけないと思いました。

また、原爆の凄まじさを物語る原爆ドーム、平和記念式典でたくさん聞こえてきた「平和を目指す」という言葉を今でも鮮明に覚えています。平和記念式典での言葉は、テレビや雑誌などでは伝わらない、発言者の心からの想いを感じ取ることができました。

この非核平和広島派遣事業は私にとって、戦争について、考えを深める一つのきっかけとなりました。今回感じたことを、今はまだうまく表現することはできないですが、自分の想いを踏まえて、自分の言葉で、次の世代に繋げていこうと思いました。そして、広島の方々が伝えたい思いを私たちが繋げていかなければならないと強く感じ、伝えるだけではなく、聞いた人に意欲的になってもらうことが大切だと思いました。私達がただ伝えるだけではなく、伝え方、伝える内容を工夫して、次の世代の人が、忘れないようにしなければならないということを新しく学ぶことができました。

戦争について

立田中学校 山田 進太

みなさんは、どうすれば平和が実現できると思いますか。私は、核廃絶こそが平和を実現するために最も有効的な方法だと思いました。それは、核兵器という非人道的な兵器の恐ろしさを、今回の非核平和広島派遣事業で学んだからです。原子爆弾による熱線です。火傷して、皮膚がただれた人や爆心地から離れた地域へ襲いかかった黒い雨、放射線による悲惨な被害。そして、親が被爆者であるという理由で差別を受けていた原爆二世の方の話は、とても衝撃的な内容でした。そんな原子爆弾を広島、長崎に投下するという、過ちを二度も犯したのに、未だに、核兵器を保持しているという異常な事態に世間が気づかない限りは、平和は実現できないと思いました。

核のない平和な世界の実現のために重要なのが、広島と長崎の存在です。原爆投下から約80年という月日が経ち、被爆者の高齢化が進み、実際の証言を聞く機会が減少しています。やがて聞けなくなってしまうのは、時間の問題です。

広島では、毎年、平和記念式典が行われています。式典での演説は、核抑止論の破綻と平和への願いが強く訴えられていた印象でした。今年の式典には多くの国の参列者がいて、真摯に演説を聞かれました。国や文化に関わらず、その場にいた方たちが平和を願っていました。私は、世界へ核のない平和が広がる中心に、自分がいると思うと、とても感慨深く思いました。

他にも驚いたことがあります。それは街の復興がとても進んでいたことです。戦後は、ありとあらゆる物資が足りず、闇市と言われる適正価格の何倍もの値段で物が売られている市がありました。心身ともに疲弊している状態で、すさまじい速さで復興が進んだのは、人々が明るい未来を信じていたからだだと思います。式典でのことも代表の平和への誓いを聞いて、今もなお、その思いが伝わっていると確信いたしました。そして、この思いを途絶えさせたくないと思いました。

広島から帰り、平和のために何ができるのか考えました。私が考えついたのは、この事実をできるだけ多くの人に伝え、広めていくことです。8月6日、9日の悲劇をもう二度と繰り返さないために、力を尽くしたいです。

戦争について

立田中学校 横井 依菜

私は、8月5日から6日にかけて、非核平和広島派遣事業に参加しました。私は、戦争のことについて、授業で習った程度のことしか知らなかったもので、戦争について、表面的にしか見ることができませんでした。しかし、広島平和記念資料館に行ったり、語り部の方の話を聞いたりする中で、戦争の本質を知ることができたと感じました。

私が、このように思えた理由は、平和記念公園を案内してくださった方の言葉です。その方は「原子爆弾の怖さは、一つ目は放射線、二つ目は爆風、三つ目は熱線」とおっしゃっていました。また、原子爆弾による雨や、人影がうつるほどの強い光と熱、川の水が見えなくなるほどの人が、体を冷やすために川に入っていたそうです。そのぐらい原子爆弾は恐ろしいものだとおっしゃっていました。また、平和記念資料館では、原子爆弾で頬がはがれ、針のようなものでぬいつけられている子供の写真を見ました。苦しいとか、悲しいとか、そんな言葉では言い表せない気持ちになりました。

私は広島に行って、戦争は価値観の違う国同士が、ちょっとしたことで揉めたことによって起こったのだと思いました。そして、自由を奪いました。世界には宗教が違う人もいれば、民族が違う人もいます。様々な文化をもつ人がいます。今の日本は、平和で自由があるのかもしれませんが、しかし、みんなに平等に権利が与えられていたとしても、その中で生きやすいかどうかは人によって変わると思います。きっと生きにくいと感じている人もいるはずです。そのうえ戦争を起こしてしまえば、自由も平等もなくなってしまいます。

私は、戦争を経験したことがありません。これはすごくありがたいことだと思います。だからこそ、原爆ドームなど、戦争によって起きた悲劇を目の当たりにすることができるものを残し、後世に伝えていくことが大事だと思います。そして、その役割を果たすのは私たちです。私は、非核平和広島派遣事業に参加して、戦争は何も残さないことを知りました。なので、戦争は絶対に起きてはならないことだと改めて感じました。

広島が語っていたもの

立田中学校 水谷 太一

僕は、広島に行く前までは「広島は、世界で初めて原爆が投下されたところ」としか思っていませんでした。しかし、非核平和広島派遣事業に参加して、このような考えではいけないと感じました。特に広島平和記念資料館で皮膚が焼けただれた人たちや、後遺症で苦しんでいる人たちの写真を見て、その人たちが助けを求めていること、苦しみを訴えていたことを痛感しました。それと同時に僕は、ただ亡くなられた方々が安らかに眠れることを祈るしかない無力さを感じ、当時かろうじて生き延びた人たちも、今の僕と同じような気持ちだったのかと思うと、とても心が痛くなりました。

また、被爆した人たちは原爆による熱線と、爆風、放射線による被害がとても強く、それを物語っていたのが原爆ドームでした。これほどの破壊力をもったものが、何十万人もの人に襲いかかったと思うと、恐ろしくてたまりませんでした。しかし、原爆が近くに投下されたにも関わらず、今もこの建物が残っていることを考えると、この原爆ドームはどんなことがあっても、残していかないといけないと思いました。

世界では今も「核なき世界」が目標となっています。その実現への第一歩として、僕は世界の核保有国の方に広島に一度来てもらいたいと思いました。そして、原爆ドームを見てもらいたいと思いました。

僕は、広島を訪れ戦争の悲惨さと、原爆の恐ろしさを学びました。原爆や戦争は不幸を生む、人として情けない行為。そう実感させられた二日間でした。そして、僕が広島で感じてきたことを未来へと伝えていきたいと思いました。

8月6日を通して

八開中学校 藤原 響希

8月6日、そして9日。あの日、ただ生きていた罪のない大勢の人々が、四千度の熱線により一瞬にして命を奪われました。街は地獄に変わり、どこを見ても死体で溢れ、癒えることのない悲しみが広島と長崎を包み込みました。何十万人の未来を奪い、消えない爪痕を残した、あの原子爆弾が投下されたせいで。その事実を知っていても、心の底ではまだ実感できない人は多いのではないのでしょうか。皆さんは、身近な人が死にゆく恐怖を想像することはできますか。明日が来ることは当たり前でないと思うことはできますか。難しいと思う方も多いと思います。実際に体験してみないと感じられない思いは沢山あります。きっと戦争もその一部です。私も実際に原爆ドームを目にするまではその恐怖を心の底から感じることはできませんでした。原爆ドームは、元々産業奨励館といい、広島の産業の中心を担ってきました。でも、現在残されている世界文化遺産としての原爆ドームは、触れてしまえば破片が落ちてしまうほど脆く、とても人間の手でこうなってしまったとは思いたくないほど、恐ろしいものです。一目見ただけで、中にいた人たちの味わった「恐怖」がひしひしと伝わってきました。非核平和広島派遣事業を通じて私の味わった恐怖は、今当たり前のように核兵器のある世界に疑問を持つきっかけになりました。この悲劇を繰り返させないという決意に変わりました。

核兵器のない世界にするためには、争いの原因をなくす必要があります。飢餓、貧困、差別。両手では数え切れないほどの事実を私たちは一つ一つ、確実に無くしていかななくてはなりません。そのため大切なステップとして「協力」があります。一見当たり前のように思えるかもしれませんが、その当たり前が広島と長崎の悲劇を繰り返さない未来をつくと、私は確信しています。そしてそんな来をつくるために、私も精一杯自身にできることをしていきたいです。

広島で感じたこと

八開中学校 水谷 栄斗

僕は、広島原爆ドームや平和記念資料館に行って感じたことや思ったことが沢山ありました。

最初は、広島平和記念資料館に行きました。原爆当時の様子が多く展示されていて、悲惨さを感じました。放射線による被害、爆風による被害、熱線による被害の様子の写真や遺品、当時の写真の怪我をしている人、後遺症が残って苦しんでいる人の写真も展示されていて、見ていると胸が詰まってとてもつらい気持ちになりました。その中でも、小さい子供用の服が放射線による熱で溶けたり破れたりしていて、なんとも言えない悲しさを感じました。原爆に関連する映像を見たりして、戦争はあってはならないと感じました。原爆投下時の様子が画像になっているものもあり、リアルに見えて思わず言葉を失いました。どれも悲惨で残酷で悲しい写真ばかりで、戦争という行為がどれ程恐ろしいものか改めて認識することができました。そして、今の平和がありがたいと思いました。

次は原爆ドームです。原爆ドームは写真でしか見たことがなかったので、実際に見ないとわからない感覚、戦争や核の悲惨さ、平和の大切さを身に感じました。

僕たちが今できることは、この非核平和広島派遣事業で、画像では伝わらない、行った人しかわからない感情があり、それをみんなに広めることだと思います。これからも平和を願って、平和なことを当たり前と思わず過ごしていきたいと思いました。

広島で学んだこと

八開中学校 鶴見 あゆら

私は、非核平和広島派遣事業で多くのことを学びました。広島平和記念資料館や平和記念式典などを実際に目で見て聞いて感じる事ができて、とても勉強になりました。

一日目は、平和記念公園に行きました。公園内には、「原爆の子の像」があり、年間約一千万羽、重さ約10トンにもものぼる折り鶴が捧げられています。実際に、折り鶴を捧げて、貴重な体験をすることができました。平和記念資料館では、当時の写真や映像などを見ました。そこでは、原子爆弾によって服や三輪車などが溶けてボロボロになっている遺品が展示されていました。また、原爆による熱線、熱風、放射線で人体に大きな影響を与えたことが分かりました。資料館内を見ていく中で悲惨な写真などもあって、原爆がすごい威力でどれだけ怖いものか物語っていました。

二日目は、広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参加しました。式典には海外からもたくさんの代表の人たちが来ていて多くの人に参加していました。こども代表の小学生は平和への誓いを、広島市長は平和宣言を読み上げていました。日本は、二度と戦争をせず平和な国でいることが大切だと思いました。

最後に原子爆弾によって広島やたくさんの方が亡くなってしまったことは、一生忘れてはいけない大きな出来事だということです。私は、その時代に生まれていなかったからわからないけど、関わった人たちは忘れることができないし、自分も忘れてはいけないと思いました。広島で実際に見て聞いて体験したことをいろんな人に伝えていきたいです。

広島派遣

八開中学校 坂 飛我

僕たちは、8月5日と6日に広島を訪れました。広島で特に印象残っていることを2つ紹介します。

1つ目は原爆ドームについてです。原爆ドームは、広島市における原爆投下の悲劇を象徴するものとして保存されていました。原爆の犠牲者への敬意を表し、核兵器の使用がもたらす恐ろしい結果を世界に訴える役割をされていて、この建物は、戦争や暴力の痛みを感じさせ、平和を守る重要な使命を担っています。一方で被爆の悲劇から学び、同じ過ちを繰り返さないようにするための警鐘でもあります。原爆ドームは歴史的な記憶の一部として、平和への願いと教訓を次世代に伝える大切なシンボルとなっているそうです。原爆ドームでは被爆の悲劇と平和への願いが建物から伝わり、過去と未来をつなぐ場所と感じました。被害の大きさと人々の復興の意志に心をとても動かされました。戦争の痛みと核兵器の恐ろしさを改めて考えさせられる場所でした。

2つ目は平和記念式典についてです。広島市原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式は毎年8月6日に開催され、政府や国際機関の代表者、被爆者、遺族、一般市民などが集まり、原爆の犠牲者への黙とうや平和へ祈りが捧げられます。式典では、平和宣言が読み上げられていて、被爆者や遺族からの訴え、世界の平和のためのメッセージが述べられていました。この式典は、戦争の悲劇を忘れず、二度と同じような出来事が繰り返されないようにするための大事な式典なので、平和への願いを示す場として大切にされています。

広島を訪れて、原爆の被害を目の当たりにするのはとてもいい経験になりました。原爆ドームでは建物の壊れた姿が、被爆の痛みと犠牲者への尊厳を象徴していて、平和への願いと核兵器の恐ろしさが強く伝わり、戦争の悲劇を肌で感じることができました。平和記念式典の雰囲気も、人々の一致団結と平和への熱意が伝わり、深く感動しました。戦争の悲劇を忘れず、平和の大切さを共有し、広島は多くの人々に勇気を与えていると感じました。

広島派遣事業を終えて

佐織中学校 齊藤 衿次

僕たちは、8月6日の惨劇について学ぶために広島へ向かった。

まずは1日目に、平和記念公園に行き市民の皆さんが折った千羽鶴を参加者全員で奉納した。千羽鶴には、幸福祈願や災害祈願などの意味が込められていて、平和のシンボルにもなっている。吊るすところには、鶴を使って虹や平和の文字を表現してあるものもあった。その近くには「原爆の子の像」というものがあった。これは、原爆の影響で白血病になり、わずか12歳でこの世を去った佐々木禎子さんをはじめ、原爆で亡くなった多くの子どもたちの霊を慰め、世界に平和を呼びかけることを目的としている。また、全国3100校余りの生徒や子どもたち、イギリスなどの世界の人々からの支援によりこの像を完成させたと聞き、とても温かい気持ちになった。

次に、広島平和記念資料館に行った。実際に被災した子どもが着ていた服や遺品、離れて暮らしている子どもに向けた親の手紙などが展示されていた。中には、実際に被爆した方の写真などがあり、改めて原爆の威力と恐ろしさを実感した。

2日目、僕たちは平和記念式典に出席した。式典では、こども代表の平和への誓い、岸田総理大臣や湯崎広島県知事、国際連合事務総長の挨拶があった。中でも、湯崎知事の核兵器所持を支持する人たちへの言葉で、「地球上のすべての生命に対して責任を負えるのか」という言葉が今でも強く心に残っている。

今から、78年前の8月6日午前8時15分、広島県広島市に原爆が投下された。相生橋よりやや南東の島病院が爆心地である。高度約600メートルの上空で核爆発を起こし、この核攻撃により当時の広島市の人口35万人の内、9～16万6千人の人が被爆し4か月以内に亡くなった。被爆した人たちやその遺族の怒り、悲しみ、恨みなどは僕たちに分かるわけもない。だが、このような惨劇をもう二度と繰り返さないために、自分には何ができるのかを、今一度考えてみようと思った。

広島と原爆について

佐織中学校 鈴木 力斗

僕は、非核平和広島派遣事業で8月5日と6日に広島へ行った。5日は語り部さんの話を聞き、原爆ドームを見た。78年間原爆の恐ろしさを伝え続けている建物は、とても大きく感じた。その後、広島平和記念資料館で原子爆弾とその被害について学び、6日に平和記念式典に参加した。

平和記念資料館の展示物は、被爆者の傷だらけの姿の写真、溶けたガラス瓶など、どれも悲惨なものだった。その中で心に残ったのは、階段に残った人の影だ。その人はきっと、何も気が付くことなく一瞬にして命を奪われたのだろう。展示物を見ることで、原子爆弾が使用されたという事実が自分の中で現実味を帯びてきた。それに気づいたとき、怖くて吐き気がした。核兵器使用の可能性を持つ戦争は本当に恐ろしいものだと思う。正直、資料館に入るまで、この世界に核兵器があるということに関心がなかった。原子爆弾が一瞬にして多くの命を奪うものだという事は知っていたが、自分には関係ないことだと考えていたからだ。これは知らなかったのと同じだ。きっと、多くの人がそうではないだろうか。ニュースを見ない、ゲームやSNSなど面白いことがたくさんある。誰だって楽しいことだけ考えたい。戦争や核兵器のことなんて考えてすらいけないのではないかな。

今、世界には核兵器がある。「核兵器こそが世界の平和のために必要だ」と考えている人たちもいる。これも戦争がなくなる原因の一つだ。だから戦争をなくそうと努力することが大切だ。原爆ドームが伝えているのは、原爆の被害だけではなく戦争と平和についてだと思う。僕は、広島へ行き爆心地を見て、平和とは理不尽に人の命と自由が奪われることがない世界だと思った。核兵器の廃絶や根絶こそ、平和な世界への第一歩なのではないかな。

この日、核兵器は本当に怖いものだと知った。平和な世界を築くためにもこの日のことを忘れずにいたい。自分にできることは、今日見たことや感じたことを、同世代そして次世代の人に伝えることだと思う。僕たち学生が、広島へ行って学んできた意味は、戦争や核兵器について考えるためなのではないだろうか。それによって、一人でも多くの人が戦争や核兵器について考える機会を作りたい。

昔と今の見えるもの

佐織中学校 堀田 えり

私は、非核平和広島派遣事業に参加し、ものの見方が変わりました。

被爆体験のお話では、原爆の恐ろしさについて聞きました。広島では、原爆の「放射線」「爆風」「熱線」によって、一瞬で建物が吹き飛び、人々は溶け、爆心地から遠い距離にいた人たちも障害に苦しみ亡くなったそうです。語り部さんの「昔は活気あふれる街で、たくさんの人の笑顔であふれていた場所だった」という話を聞いて、そんな街が一瞬の出来事によって何もなかったかのようになり、そこに住んでいた人たちの大切なものや場所、今まで一緒に過ごしてきた仲間や家族を奪ってしまったのだと考えると、今の広島は本来あるべき姿ではない場所に思えました。

広島平和記念資料館では、戦争の恐ろしさを目に焼き付けられました。初めは、戦争や原爆について学ぶ資料という感覚で見えていましたが、絵や実際の写真、戦争によってボロボロになってしまったものなどが展示してある場所に入った途端、「今まで見ていたものとは違うものを見ているのではないか」と思ってしまうほど恐ろしく感じました。そこには、皮膚が溶けて全身がぐちゃぐちゃになり人間とは思えない姿の人の写真や、川の水が見えないほどたくさんの人たちの死体が流れている絵、熱で焼かれてしまい跡形もない物などがありました。見ているだけでもかなりの衝撃を受けるのに、そんな状態の中で生きていた人たちがいたことを考えると、戦争は本当に恐ろしいものだと思います。

平和記念式典の前日に、このような被災のお話を聞いたので、式典でこども代表の誓いの言葉を聞いたときは、このようにして戦争を知らない子どもたちへ広島の記憶をつなげていき、その子どもたちがまた新たな世代へとつなげていくように感じ、今までテレビで見ていたものとは別物に思えました。

私は、この2日間で広島や戦争の見方が変わりました。非核平和広島派遣事業で、とても貴重な体験ができてよかったです。そして、1年、1日、1秒でも早く世界から戦争がなくなり、平和になってほしいと思いました。

語り継いでいかなければならないこと

佐織中学校 森 菜々美

世界で初めて原子爆弾が投下されてから早くも78年が経つ年、2023年8月6日。私は、初めてその地、広島を訪れました。昔、大きな爆撃音と共に、土地や人、植物など多くの生命を奪い、苦難を残してB-29爆撃機「エノラ・ゲイ」は、キノコ雲が充満していく広島の街から姿を消していった。という事実があることを思いながら、私は今は晴れ渡る青空の下を歩きました。

平和記念公園を訪れ、語り部さんの話を聞き、この公園の下には爆撃にあった家屋の瓦礫や人の死体などがそのまま残っており、その上が今の公園になっていることを知りました。この地が爆撃を受けた直後の写真を見て、ここまで復興し、多くの人に語り継がれている喜びと、爆撃前の賑やかだった商店街とは変わり果ててしまったことの虚しさを同時に感じました。原子爆弾が投下された歴史は変えることができないけれど、やはり、爆撃投下の悲劇がなければ被爆者たちの笑顔がこの街から消えることはなかったのだと、一瞬で生活を変えられてしまう爆撃の恐ろしさを改めて思い知らされました。

そして、平和記念式典に参列して、式典では広島の子どもや政治家、それぞれの原爆に対する思いや考えを聞くことができました。その中でも私は、こども代表の「平和への誓い」がとても心に響きました。広島で生まれ育ち、実際の被爆者の子孫であるこどもたちが世界に向けて平和を発信している姿に感動を覚え、私も平和に向け少しでも貢献したいという気持ちが強くなるきっかけになりました。

非核平和広島派遣事業を終え、平和について学んだ今、自分が学んで終わりではなく、家族や友達に伝え、その糸が平和を紡いでいくのではないかと考えます。これから生きていく中で、この事業で学んだことを一つも無駄にせず、当時の被爆者が減少していている今だからこそ、原爆の恐ろしさを周りの人たちと再確認し、平和の実現に向けて動いていきたいと思います。

これからの平和について

佐織西中学校 稲生 優之介

8月6日午前8時15分、広島県広島市の上空600mで原子爆弾が爆発しました。この爆発で約14万人が亡くなりました。の中には、妊婦さんや障害を持った人、日本に移住した外国人などもいて、多くの人々が無差別に原子爆弾によって亡くなりました。また後遺症が残り亡くなってしまった人もいます。平和記念公園にある、骨組みのみ残っている原爆ドームや弾けるように散ったお寺の石碑などがあり、原子爆弾の爆風や衝撃波の恐ろしさを実物が残っていることで感じられました。

私は、この2日間で平和について学びましたが、戦争に関係のない人たちが一つの爆弾によって人生が一瞬で消えてしまうことにとっても疑問に思いました。広島平和記念資料館にある被爆によって亡くなった人達の言葉のなかで最も心に残るものがあります。

「最後に桃が食べたかった」この言葉は、被爆した女性の言葉です。原子爆弾は、関係のない人の生活を壊し、食べたいものも食べられず殺してしまう兵器だと思いました。また、当時の被爆してからの写真や午前8時15分で止まったままの時計など、一目見ただけで恐ろしく感じられました。また、原子爆弾の強烈な熱線と衝撃波によって全てあり得ないような壊れ方や見た目をしていて、原子爆弾の威力や恐ろしさについて学ぶことができました。

私は、平和記念公園でのガイドさんの説明や平和記念資料館の写真や当時の服を見て、戦争を繰り返して欲しくないと感じました。「平和」とは何か、争いを起こさず幸せに生活することだと思いました。

また、当時の人は、毎日家の上を爆撃機が通って普通の生活ができませんでした。私たちは、このような、忘れてはならない事実を伝えていくことが大切だと感じました。

小さな「平和」を守るために

佐織西中学校 長瀬 嵐

僕達は、8月5日と6日の二日間、愛西市の非核平和広島派遣事業に参加し、被爆地であるヒロシマを訪れ、平和について学びました。

1945年8月6日、広島は平和な1日の始まりを告げる快晴の朝に、あの全てを無に返す一発の原子爆弾が投下されました。僕は、14万もの命が一瞬にして奪われ、今もなお、原爆の放射線の後遺症で苦しんでいる人がいるということを知り、語り部の方から聞いて、広島で起こってしまったこの惨劇を二度と繰り返してはいけないことだと再認識しました。平和記念公園では、当時の人々の痛々しい傷や焼け野原となり、何もなくなってしまった街の写真や資料を見て、核兵器の恐ろしさを感じました。原爆ドームでは当時のまま現存するその姿を見て、後世にもあの時の惨劇を伝えようとする人々の努力や平和を願う気持ち、核廃絶を強く願う気持ちを感じました。そして、8月6日、僕達は広島原爆死没者慰霊式並びに平和祈念式に参列しました。テレビでしか見たことのないこの式典でしたが、その場ではテレビからだけでは感じることはできない、その場にいるすべての人が平和を願っているという強い平和への希望を感じる事ができました。午前8時15分からの1分間の黙祷を捧げ、原爆死没者の霊を慰めるとともに、世界平和の実現を僕も式典参列者である以前に一人の人間として願いました。僕達は、非核平和広島派遣事業の2日間を通して、核兵器の恐ろしさや戦争がもたらした悲劇の数々を見たり、聞いたりして学びました。

それと同時に、平和とは何なのかについても考えました。戦争をしないことは世界の平和に少し近づくと思います。友達や家族と仲良く過ごせていることが「平和」という言葉の意味の一つだと思います。このような小さな「平和」を守っていくことが、皆が望む「平和な世界」を創っていくためには大切だと僕は思います。

これからを生きる私たちにできること

佐織西中学校 松永 結衣

私が、今回の非核平和広島派遣事業で一番印象に残っている事は、広島平和記念資料館で見た被爆者の証言や数々の痛々しい写真です。今までは、社会の教科書に出てくる写真やテレビに映る写真などでしか原爆の被害を見てきませんでした。今回初めて平和記念資料館に行って、想像を絶する被害を自分の目で確かめてきました。

一番原爆の恐怖を肌で感じたのは、当時の中学生が着ていた学生服の実物を見た時でした。その服は黒く焼け焦げ、袖は無くなっていました。この学生服から皮膚が焼け爛れるほどの熱線を浴びたことが想像できます。資料館内の写真の中には実際に服が皮膚に焼き付いて剥がれなくなっている人や、皮膚がただれている人、全身に大火傷を負い炭化状態になっている人、顔の皮膚がただれて顔のパーツが分からなくなっている人など恐ろしいほどに痛々しい写真が多くありました。他にも人影の石と呼ばれる石の上に座っていた人が熱線によって、一瞬にして消えてしまった跡が残っている石が実際に置かれていました。当時と比べれば影は薄くなっていますが、それでもなお影が残っており鳥肌が立つほどの恐怖を感じました。人が一瞬で焼け爛れ、消えてしまうほどの熱とは一体どのくらいなのか、私たちには想像もできません。それほど熱に苦しめられた当時の被爆者の方々を思うと心が苦しくなります。

爆心地から近い場所では、被爆した大勢の人が、周りが炎で燃えている熱さや火傷を少しでも和らげるために、川に飛び込んでいたと資料で見ました。「川に入るな」と忠告を受けても入らなければならないほど熱かった、しかし、飛び込んだ人たちは皆死体となって川に浮かんでいたそうです。その光景を想像するだけで、悍まじさに身がすくみます。

原爆ドームも今まで、テレビ中継や写真でしか見てきませんでした。実際、近くで見ると写真だけではあまり感じる事のなかった恐怖、迫力を感じました。爆風で飛ばされた柱、熱線で溶かされた鉄筋、剥き出しになった骨組みなど破壊された建物から原爆の威力を思い知らされました。

私たちは、今後何を思いながら生きていくべきなのでしょう。私は、今回の非核平和広島派遣事業で学んだこと、聞いたこと、知ったことを周りの人に話し、原爆の恐ろしさを後世に語り継いでいくべきだと思いました。現在ロシアがウクライナに対しての使用が危惧されていますが、核兵器を無くそうと、平和な世界を作り上げようと唯一の原爆被爆国である日本から世界へ向けて発信しているにも関わらずそんな悲惨な戦争が起こっています。被爆者の平均年齢が85歳を超えた今、私たち若い世代が広島、長崎

に投下された原爆の被害について語り継いでいかなければなりません。広島、長崎に落とされた原爆で亡くなった多くの人は何の罪もない人々です。なぜそんな人たちがいきなり投下された原爆で人生を壊されなければいけなかったのでしょうか。現在でも、原爆症に苦しまされている人も多くいます。二度とこのような悲惨で残酷な被害を出さないために、核兵器が少しでも早く廃絶されてほしいです。

非核平和広島派遣事業に参加して

佐織西中学校 山本 楓

私たちは8月5日、6日に非核平和広島派遣事業に参加しました。

1日目は、平和記念公園に行きました。平和記念公園では千羽鶴の奉納と献花をしました。千羽鶴の奉納ではたくさんの方々が参列しており、改めて原爆の被害の大きさや、非核運動の重要性を知ることができました。

平和記念公園内は、水が様々なところで流れていたり、火がずっと灯されたり被爆した方々のことを想い、寄り添ったつくりになっており、とても工夫されていると感じました。

原爆ドームでは、鉄心が丸見えになっていたり、壁がボロボロになっていたり、外から簡単に建物の内部が見えるようなひどい状態になっていました。お寺の吹き飛ばされた石碑のかけらからは、原子爆弾の風力や熱線がどれだけのものだったかを思い知らされました。実際に被災地を目にすることで、広島原爆がどれほど恐ろしいものなのかを知ることができました。

広島平和記念資料館では、原爆の仕組みや後遺症について学んだり、被爆した方々の写真を見たり、被災した衣服や物、黒い雨の恐ろしさ、原爆の被害の大きさや怪我人、死亡者の多さを知ることができました。特に黒い雨は、大火傷や大怪我で水を求める人々を苦しめ、今でも後遺症で苦しんでいることを知り、とても残酷だと思いました。

2日目は、平和記念式典に参列しました。日本国内だけではなく、国外からもたくさんの方が参列していました。式典の中で、内閣総理大臣や広島県知事など、たくさんの方が原爆や平和への想いを述べていました。その中でも、特に広島県知事の核についての話が印象に残っています。平和について、多くのことを学び、考えた2日間になりました。

